令和6年度　第1回研修会

神奈川県立歴史博物館特別展「近代輸出漆器のダイナミズム―金子皓彦コレクションの世界―」に参加して

大磯町郷土資料館　長谷川　明香

はじめに

令和6（2024）年5月10日（金）、神奈川県立歴史博物館地下講堂を会場として、神奈川県博物館協会令和6年度第1回研修会が開催された。本研修会は、神奈川県立歴史博物館の丹治雄一氏による司会進行のもと行われた。内容は、「博物館法改正にともなう博物館登録にかかる手続き」の説明会と神奈川県立歴史博物館特別展の解説及び見学会であった。展示の概要及びそのノウハウなどを共有することで、博物館における展示活動の向上を図る目的であった。

本研修会に参加し、私が感じたこと、考えたことを少しではあるが述べたいと思う。

1．博物館登録手続きに関する説明

図1　博物館登録手続きに関する説明の様子

研修会の最初におこなわれたのが、博物館登録手続きに関する事前説明会であった。令和5年4月から施行された改正博物館法において登録審査基準の見直しが明記されたことを受け、登録に必要な手続き等を対象となる博物館施設管理者へ、神奈川県教育委員会から大まかに説明がなされた。登録の更新手続き及び新たに登録を考えている博物館に対して必要な書類等を説明するものであった。この改正に基づく登録の更新あるいは新たな手続きだが、早急に進めることができる館と様々な状況から進めることのできない館があることは事実だろう。事実、手続きが完了していない館がほとんどである。今後、どの程度進んでいくのだろうか。

2．神奈川県立歴史博物館特別展の解説と見学

図2　展示解説の様子

次に、神奈川県立歴史博物館にて、令和6年4月27日～6月30日の会期をもって実施された特別展「近代輸出漆器のダイナミズム―金子皓彦コレクションの世界―」の担当学芸員による解説及び見学会が行われた。博物館のある横浜は、輸出漆器の中心地で、近代では有数の漆器の産地ともなった。近代輸出工芸の重要な一つであるが、その実態は明らかにされていない点も多く、課題であり、輸出漆器の全貌とその魅力を伝えることが本展示会の目的であった。

展示は、國學院大学名誉教授で、輸出工芸のコレクターとして長年、海外で主に蒐集されてきた金子皓彦氏のコレクション資料を中心に構成されたものだった。展示された漆器の種類や大きさは

図3　解説シート

幅広く、なかでも屏風やライティングビューローといった大きいサイズの漆器は見る者を圧倒する存在感と重厚感があった。資料数も多く、非常に見応えのある展示であったと感じた。

今回の展示の特徴的かつ興味深いと感じた点が展示解説シートやキャプションの工夫であった。

展示ではあくまで漆器そのものを見てほしいという意図があり、キャプションの分量は比較的抑えられていた。最低限の情報を盛り込み、資料への着目を促していた。担当学芸員が漆器というテーマが堅いため、資料キャプションの初めにキャッチコピーをつけることでその堅さをやわらげる工夫が施されていた。我々、学芸員が展示をつくるとなると、主観的になり、研究色の強いいわば玄人志向になってしまうことがある。そのような展示もある種面白いと思うのだが、幅広い世代に見てもらいたい展示となると、なかなか受け入れられない。テーマが如何に堅く玄人向けであってもそれをいかに幅広い世代へ受け取ってもらうかということの難しさを感じた。次に、展示解説シートだが、作成の意図としては都合上、図録を作成することができなかったため、その代わりという

図4　子ども向け冊子

ことだった。その解説シートは、新聞スタイルで、全8ページにわたる解説シートとしてはボリュームのあるもので、展示のみどころやキャプションには記載しきれなかった注目してほしいポイントなどを伝えるものであった。図録の作成が難しい事態は起こりうることであり、もしそうなった場合にどのようなことをすべきか正解はないが、このような少し分量多めの解説シートはある種一つの方法であろう。また、新聞スタイルとし、内容もコラム的な要素を取り入れ、堅い表現ではなく柔らかくポップな形にすることで来館者が楽しんでもらえるような工夫がなされていると感じた。さらに、漆器については子どもへの理解が難しい内容であることから子ども向けにクイズ形式の解説冊子も作成したとのことで、幅広い世代への配慮がなされていた。

おわりに

本研修会で改めて感じたことは、県博だからこそできる展示、そしてその他の作成資料の工夫を見たが、ではそこから何を学び、そして市町村レベルの博物館でできることは何かということであった。資金面や人員などそれぞれ異なり、同じようになど当たり前だが難しいのが現実である。しかし、同じようなレベルを求められてしまうこともある。そのなかでいかにして展示を行うのか、それこそ学芸員の主たる活動であり、腕の見せ所なのではないかと改めて思う。また、展示自体や展示を補完する付属の資料などすべてにおいて、調査研究という根幹をおろそかにしてはいけないということである。事実、博物館業務の多岐化や人

員不足、評価主義の風潮により調査研究に時間を費やすことができない状態になっている。本末転倒だが、その状況に憂いていても仕方がない。柔軟な考えを持ち、評価される「目に見える部分」と根幹の「目に見えない部分」の両輪で運営していくほかないと考える。

最後に、本研修会で展示の解説とノウハウを共有してくださった神奈川県立歴史博物館学芸員の鈴木愛乃氏、会場の神奈川県立歴史博物館の皆様、神奈川県教育委員会の皆様、企画・開催していただいた神奈川県博物館協会の皆様に心より感謝申し上げる。

令和6年度　第2回研修会

研修会「デジタルアーカイブズの運用と課題」に参加して

横須賀市自然・人文博物館　瀬川　渉

はじめに

令和6年7月12日に横浜開港資料館講堂において、令和6年度第2回研修会が開催された。講演者として日本大学生物資源科学部の野村正弘教授、事例発表者として横浜開港資料館の神谷大介調査研究員、茅ケ崎市博物館の須藤格館長、小田原市文化部生涯学習課郷土文化館係の吉野文彬氏が登壇された。

この研修会は、博物館法改正により新たに博物館の事業として明文化されたデジタルアーカイブズについて、実務者である学芸員が前提となる理論や他館の事例を学ぶものである。令和5年度第4回研修会も同じ趣旨にて実施されており、2年連続の研修会でもあった。昨年度も今年度も参加者数が多く、学芸員をはじめとする博物館関係者が自館の課題として注目していると思われる。

講演　「博物館現場のためのデジタルアーカイブズ論2」

昨年度と同じく、日本大学生物資源科学部で学芸員課程を担当されている野村正弘教授が登壇された。昨年度は「そもそもデジタルアーカイブズとはどのようなものか」について、理論や法律のみならず技術的な要素も含めて、群馬県立自然史博物館での勤務経験をもとにご講演された。今回の研修会では、知的財産としてのデジタルアーカイブズに重きを置いてのご講演であった。まず「デジタルアーカイブズそのものが知的財産」であるとの説明に驚いた。素材の選択と配列に創作性があれば、それは知的財産であるとの言葉に、ハッとさせられたのは私だけではないだろう。我々がデジタルアーカイブズの構築を検討する際に、使用する映像・画像・出版物等の権利者への許諾を気にするあまり、デジタルアーカイブズを構築

図1　研修会の様子

する博物館が編集著作権者としての立場を有していることは意識していないと思う。野村教授から「せっかくの権利は主張すべきときは主張すべきである」との意見が述べられた。講演内容全体として、各々がどのような権利を主張できるのか、そしてその主張がどこまで認められるのかをテーマにされていたと受け取った。権利を主張される可能性（争いになる可能性）があるなら外部に公開しない方が良いとのことであったが、著作権法自体が2年に1回の頻度で改正され、様々な判例が出てきている現状を踏まえ「著作権は生物、その時々で最新の法律・判例を確認せよ」との指摘が結論であった。その後の質疑応答でも述べられていたが、資料寄贈の際はその所有権だけでなく知的財産権の譲渡も書面にて確定させるのが肝要とのことである。過去の経緯などは変えられないため、取り扱いが難しい資料については保留にするしかないが、今後はデジタルアーカイブズでの公開も視野に資料収集をする必要があることを強く認識できたご講演であった。

事例発表Ⅰ　横浜開港資料館デジタルアーカイブの現状と課題―整理・公開方法の再検討―

横浜開港資料館の神谷大介氏による事例発表では、2024年1月から公開された「横浜開港資料館デジタルアーカイブ」について、導入の経緯から現状分析までをご説明いただいた。「横浜開港資料館における文化観光拠点計画」が文化庁に認定され、スタートしたデジタルアーカイブ整備は、複製資料利用申請手続きの円滑化と資料との出会いの機会創出が主な目的とのことだった。私もこの参加記を執筆するにあたり実際に操作したところ、神谷氏が述べていたとおりワンクリック検索で絵はがきや浮世絵を順々に閲覧でき、大いに楽しむことができた。また、時節に応じたテーマに基づくピックアップアーカイブは、アクセス動機の向上による利用者の常連化を狙ったとのことであるが、これも狙いどおりのものになっている。意中の資料があって検索する利用者だけではないはずであり、テーマに沿った資料を提示してくれるのは、リピーター獲得に有効な機能だと思われる。Web展示などの名称だと、期待値が上り担当者の負担増につながるため、この名称になったとの説明があった。利用者だけでなく担当者のことも考えて運用していることに感心した。

最後に、神谷氏から現状と課題についての説明があった。当然ながら課題としてコンテンツの充実が挙げられていたが、その先に「収益化」を見据えていることにハッとさせられた。私の勤務する館は教育委員会直営であるため、コスト削減や知名度アップは議論されるものの、真の意味での収益化は意識されていない。横浜開港という誰もが知っているテーマであることに加え、桁違いの定住人口と交流人口を有する横浜市だからこそ目指せるものだと思いつつも、商用利用に対する使用料徴収などは自館でも検討する価値があると感じた。コストや収益性、運用方法などは各館なりの検討をすべきであるが、神谷氏も「公開は終着点ではなく出発点」と結んだように、博物館にとってデジタルアーカイブが市民等への新たなアプローチであることを再認識できた発表であった。

事例発表Ⅱ　デジタルアーカイブ「ちがだべ」の今とこれから～学校教育で必要とされるために～

茅ヶ崎市博物館の須藤格館長による事例発表は、内閣府デジタル田園都市国家構想交付金申請の過程から「ちがだべ」構築とその成果を発表いただいた。「資料は何のためにあるのか？誰のために資料があるのか？」を考えるきっかけになったと須藤館長は振り返った。博物館としては学校教育への支援の他にも地域振興などに「とことん」使ってほしいとの思いから、画像等の商用利用も可としているとのことである。学校教育への支援としては、来館した市内の児童・生徒が持参するタブレットに導入されているアプリ（ロイロノート）で興味のある展示物を記録するのはもちろん、館内のＱＲコードから「ちがだべ」にアクセスしてその情報を取り込み、学校でのグループ学習などに役立ててもらう取り組みがなされている。児童・生徒が集めた情報をみんなで整理することは、話し合いながら探求する展示活動に類するものであり、文科省が推進する主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）と親和性があると述べられていた。今後の課題としては、学校の先生方にまだまだ「ちがだべ」が周知されていないこと、効果測定がまだであることが挙げられていた。そして、地域の商店などが「ちがだべ」で得た地域の魅力を商業ベースで発信することが増えることを目指しているとも語っていた。私の勤務館もリニューアル計画を策定中であり、須藤館長が示

した「資料は何のためにあるのか？誰のために資料があるのか？」という問いにぶつかっている。博物館自体に大きな変革がなければ、市役所全体では議論されにくい問いでもある。それを予算面や注目度におけるチャンスと捉え、博物館の存在意義を示すためにも、地域振興についても検討を行っている茅ヶ崎市博物館の取り組みから私も学んでいきたいと思った。

事例Ⅲ　おだわらデジタルミュージアムの課題と今後の取り組みについて

小田原市文化部生涯学習課郷土文化館係の吉野文彬氏による事例発表は、事例発表Ⅱの茅ヶ崎市博物館と同じく、内閣府のデジタル田園都市国家構想交付金を利用した「おだわらデジタルミュージアム」について、発表いただいた。吉野氏も昨年度の第4回研修会において、先述の交付金申請から運用開始までを主に発表された。今回の内容では、「おだわらデジタルミュージアム」の利用状況を分析し、そこから得られた課題についての話が主であった。

まず、Google アナリティクスを使用した表示回数や流入経路（どういった手段でサイトを訪問しているか）について、オープン日である2023年3月31日から1年間の分析を述べられた。それによると、表示回数が約16万だったとのことだったが、同一人物が何度も同じページを見るとカウントが増えるので来館者数と同一視してはいけないとのことだった。コンテンツ毎の表示回数や流入経路も示しながら、全国放送で取り上げられた摩利支天像の表示回数が激増していた事例や館公式SNSの表示回数もスマートフォンでスクロールしながら見ると各投稿の表示回数が増えるので正確な数字かどうかわからない点など分析の限界も教えていただいた。恥ずかしながら、そのような分析ができること自体を知らなかったので、率直な感想としてインターネット世界の多層性と追跡可能性を見せつけられた思いだった。吉野氏は今後の課題として、特別支援学校も含めた学校教育との連携強化を挙げていた。その一例として、学習指導要領コードとデジタルミュージアムで紹介している資料との紐づけをすることによって、学習指導案を作成するときに検索しやすくする取り組みを模索しているとのことであった。私の勤務館では、コロナ禍前は市内小学校3年生の約7割の児童が社会科の「昔の道具とくらし」に関する展示解説を聞きに来ていたが、コロナ禍が明けてもその数は戻っていない。学校教育との連携の在り方を考えさせされる事例発表でもあった。

おわりに

今回の研修では、学校教育との連携強化の可能性を再認識するとともに、デジタルアーカイブズのコンテンツ充実による収益化の検討は新しい知見であった。さらに、知的財産権の諸注意やデジタルアーカイブズ自体が創作性を持った著作物であるとの指摘も貴重な学びであった。これらをもとに、各館各分野の実情にあわせデジタルアーカイブズを構築することが肝要だと思った。最後に、このような機会を提供くださった登壇者の皆様、県博協事務局や幹事の皆様に感謝申し上げる。

令和6年度　第3回研修会

展示リニューアルを経て
―より魅力ある展示の実現に向けた「横浜みなと博物館」の試み―に参加して

川崎市市民ミュージアム　菊地　悠介

はじめに

令和6年（2024）10月1日、神奈川県博物館協会主催の第3回研修会（機能研究部会）『展示リニューアルを経て　より魅力ある展示の実現に向けた「横浜みなと博物館」の試み』が日本丸メモリアルパーク内の横浜みなと博物館（以下、みなと博物館）で開催された（図1）。本研修会は2部構成となっており、まず講師の横浜市港湾局みなと賑わい振興部小國恒之氏から常設展リニューアルの概要・経緯などの説明後、横浜みなと博物館学芸員三木綾氏が展示を実際に案内しながら具体的なリニューアル内容をご説明いただいた。以下、まずその概要を述べ、講師のお二方のお話及び質疑応答からの所感を述べていきたい。

図1　研修会の様子

1. 横浜みなと博物館とリニューアル概要

横浜みなと博物館は、平成21年（2009）にリニューアルオープンし、令和6年で開館35周年にあたる。

展示リニューアルの経緯は、館の釣り天井に対して耐震対策を施す必要があったこと、浸水の可能性がある地下収蔵庫を改善する必要があったことの2点が課題として存在していたところに、みなとみらい地区に存在する博物館などは観光資源としてインバウンドなど含む国内外の集客力向上に寄与するようにとの横浜市の新たな方針があったため、おこなわれたとのことである。リニューアルの方針としても、以上の点が加味され、従来の展示のパネルを見るだけではない体験型・没入型のコンテンツ（プロジェクションマッピング、VR映像放映、シミュレーターなど）や展示解説の多言語化を導入するなどの工夫をおこない、港湾の博物館施設として「開港と埋立」をテーマに展示が設計されている。この新たな展示室、その設備をもって、以前からの展示室での展示内容を引き継ぎながらも今後は新たな観点から普及活動が進展すると思われる。また、収蔵庫については、防災の観点から地上2階以上、面積は80～100㎡、エレベーター・温湿度管理・常駐ガードマンの存在などの条件に見合う港湾局が所管する施設として、大黒ふ頭の管理棟に造成した倉庫（一般的なオフィスビルに収蔵庫を設置）へと移転し、保存計画を作成したと話があった。外部の倉庫に収蔵品を移動することは、学芸員として展示準備などで負担が増えるため、あまり好ましくないとはいえ、収蔵庫が地下にあり、海が近い施設としてはこの判断は適切だったといえよう。

2. 川崎市市民ミュージアムの状況と展示リニューアル

川崎市市民ミュージアム（以下、当館）は現在、「令和元年東日本台風」の影響を受け、施設・設備や収蔵品が被災し、館内での活動が不可能な状態となっており、長期に渡る休館を余儀なくされている。そのため、現状は市内の他施設やオンライン等で、アウトリーチ形式での展覧会やワークショップなどを開催している。

この状況から川崎市は令和3年11月に「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方」を策定し、それを踏まえ、「新たなミュージアムに関する

基本構想」を策定した。この基本構想には、新たなミュージアムの事業展開や開設候補地が示されている。開設候補地は、生田緑地ばら苑隣接区域とされているため、被災した等々力緑地の旧施設は今後使用せず新たなミュージアムを建設することとなり、自ずと新しい常設展示室を創る必要が生じてくる。その際、みなと博物館の展示リニューアルが参考になるであろうと考え、本研修会に参加させていただいた。結論から言えば、リニューアルの具体的な話以上にリニューアル作業や作業後の設備に至るまでの内実までお話しいただき、大変参考になった。

3. リニューアルにかかる費用・人員について

展示室をリニューアルする際に気になるのは、予算・費用の面が大きいであろう。みなと博物館では、補助金の導入が確定したことで事業化の目途が立ったとのことである。特に通常博物館が補助金の導入を考える文化庁だけでなく、国交省の補助金も確保できたことは大きいと考えられる。多方面からの補助金導入は、博物館の大規模な修繕・新設・リニューアルには必要不可欠といえる。

文化庁の補助金は、「Living History促進事業文化事業費補助金（生きた歴史体感プログラム）」からのもので、①展示・体験プログラムの構築から文化財に新たな付加価値（歴史の楽しみ方）を生み出すこと、②訪日外国人など観光客が日本の文化を理解・体感できるようなコンテンツ造成を推進すること、③文化財が観光の一つのテーマとなるよう体験プログラム事業を育てること、④国指定等文化財を核とすることなどが採択の条件となっている。

歴史・文化の普及という点でみれば、みなと博物館がみなとみらい地区に存在し、かなり多くの人々が周辺地域に訪れることを考えると文化財を観光に活用し、多くの人々に来館してもらうことを目指すのは当然のことだと思われる。もちろん、調査研究・保存管理は重要ではある。だが、利活用と普及の面で考えると、実際は最初に受け入れやすいものから入ることで、徐々にリピーターとなってもらい、その後にきちんとした歴史・文化を普及できることを考えると、現在の状況を鑑みても調査研究・保存管理と利活用（特に観光）とのバランスのとり方は検討する必要があろう。そういった意味では、体験・没入型のコンテンツは、活用の仕方を考えれば非常に有意義となり、関連する体験プログラムと合わせて、現代に続いている歴史・文化を体感・思考できるより実践的な学びの場を創れる可能性があると考えさせられた。

また、核となる国指定等文化財を帆船日本丸に設定したことで、帆船日本丸を中心として、集客がおこなえる点は非常に大きいと思われる。みなと博物館の場合は帆船日本丸に合わせて配置がおこなわれている点（帆船日本丸を周囲から見やすくする為に展示室を地下に配置）は大きな利点といえる。

なお、バランスの面で言えば、ライブラリー（書庫）と学芸室が直結されているのは、調査研究に対して一定の配慮がなされたという点では、好感が持てた。

次に気になるのは人員についてではなかろうか。みなと博物館のリニューアルに際しては、内容が多岐にわたるため、港湾局内にプロジェクトチームを発足させて対応した。

統括が港湾局長、リーダーにみなと賑わい振興部長・政策調整部長、サブリーダーに同両課長、整備推進課長・新本牧事業推進課長、その下にVR政策・コンテンツ制作・広報などを担当するVRチーム（賑わい振興課・客船事業推進課）、埋立展示全般・埋立資料収集・有識者ヒアリングを担当する埋立チーム（新本牧事業推進課）、国際コンテナ戦略港湾・クルーズ客船・防災などを担当する現代の横浜港チーム（政策調整課）、展示リニューアル・屋外サイン・トイレ改修を担当する施設改修チーム（施設改修整備推進課）が配置された。報告では、小國氏が関わったVRチームが3～4名（課長・係長・担当2名）以外は、定かではないとのことであったが、概ねどのチームも2名（係長・担当1名）であったそうである。なお、これらは各課の行政職員が従事している。

令和3年4月13日から令和4年3月31日の短期間でのリニューアルだったため、このような比較的多めの人員配置となったのであろうが、このような事業には人員の確保は必要不可欠であるため、自治体の規模も大いに関係するとはいえ、他自治体・他博物館も同様の事業にあたる場合は考慮すべきであろう。川崎市も市民文化局市民文化振興室内に新たなミュージアム準備担当を配置してはいるが、時が経つにつれて人員の拡充は必須であると思われる。

また、展示業者としてはトータルメディア開発研究所（以下、トータルメディア）に業務委託をおこなっており、トータルメディアからも各チームに複数人担当が配置されているとのことであるので、この点も業務委託を行う上では非常に参考となる。

行政職員で構成される各チームの場合も、トータルメディアの場合も、都度みなと博物館の学芸員に展示作成などについて相談があり、その調整がかなり重要であると三木氏からお話があった。このような三業種が関係するなかでは、いかに調整・対応するかは想像するだけでもその大変さを感じた。

図2　リニューアル展示見学風景

4. 展示室の具体的なリニューアル内容と設備

展示室の具体的なリニューアル内容と設備で気になったこととしては、現状の課題整理と方針を検討することの重要性であろう。どのような方向性、そして、旧展示室からどのような点を新しくするのか、または継承するのかは、現状の社会から求められる点や改善点などを考えるべきであろう。

そのような考えからしても、みなと博物館の航空写真の更新、開港のコーナーの充実、埋立史のより充実した内容の追加、体験・没入型のコンテンツ、展示構成の変更（展示品を時代にわせたエリアへ移動）、現代における横浜港の内容を追加した点は、リニューアルしたことによって、内容の充実が感じられた部分である。

この中で具体的に筆者が影響を強く受けたのは、現代における横浜港の内容が追加されたことであった。近現代から現代をどの時点まで博物館でとりあげるかは、自治体によって迷うところであろう。みなと博物館では、現代に至る点でみなとみらい21地区の現在と将来計画、生物共生型護岸工事、開発だけでなく漁港との共生などが展示に盛り込まれている。最新の再開発や、現代の横浜港の状況が盛り込まれることで、より来館者が横浜港を近くにあるものとしてとらえられ、さらに現状の横浜市の事業を認知するうえでも重要だと考えられる。

特に最新の情報に入れ替えられる展示のコーナーを作成した点は大きな発見であった。現在はダイヤモンドプリンセスのコロナ対応についての展示がなされていた。数年前のことを評価することはできないが、事実を展示し、来館者に知ってもらうとの狙いは新たな試みとして評価できよう。

また、展示を時代順にしたことで来館者の理解が深まる企画展がしやすくなったとの話もあり、常設展をある程度通史的に構成することは常設展以外にも影響を与えるという点で有効的であることが感じられた。全体として過去と現在をつなぐといった意味で一貫性があり、来館者も様々な点で把握がしやすくなったのではないかと思われる。

なお、体験型・没入型・デジタルのコンテンツの導入についても付記しておくと、やはり体験型・没入型のコンテンツは来館者に人気で、装置として有効であるとのお話があった。このような設備をどのように活用するかは現代では避けては通れない状態となっている。みなと博物館のように、借用で展示しているものが多く、写真撮影が不可のものが多い場合、打開策としてデジタルコンテンツの使用など（撮影が可能な資料のゾーンの作成、デジタル画像で背景が変更できるフォトスポットを出口付近に設置）有効な活用方法を見出す必要があろう。

ただ、三木氏からも課題として挙げられていたように、映像機器はメンテナンスがしにくい点（高い天井に設置すると金額がかかる、電子機器は壊れやすい、電子機器内のソフトは学芸員が変更できない仕様となっている）を考えると、安易に体験・没入型・デジタルのコンテンツを導入するのではなく、設置した後の状況も熟考してから導入すべきであろう。

おわりに

雑駁に感想をつらつらと述べたが、最後に本研修会でお話をいただいた小國恒之氏はじめ、展示案内をしていただきながらお話をいただいた三木綾氏、ご対応いただいた横浜みなと博物館の皆様、

また、本研修を企画・運営してくださった県博協の皆様に感謝申し上げたい。

今回の研修会では、展示以外の事業概要と運用面についてもお話があり、非常に充実した内容で、今後常設展のリニューアルを考えている館にとって非常に有益な事例報告であった。当然、館自体を新しく建設し、常設展を一から作成する当館にとっても、新しい常設展を考えるうえで大いに参考とさせていただくこととなろう。

神奈川県博物館協会　令和6年度　第４回研修会「周年事業のあれこれ～動物園・水族館・博物館の事例紹介～」に参加して

相模原市立博物館　領家　玲美

はじめに

相模原市立博物館は2025年11月20日で開館から30周年を迎える。来年度の予算も見え始め、周年事業の内容をいよいよ本格的に考えなければならないタイミングでの今回の研修会となり、少しでも当館でも取り入れられる良いアイディアはないかという一心で参加を希望した。会場は、2024年4月24日に開園25周年を迎えた「よこはま動物園ズーラシア」で、日頃から様々なイベントに取り組まれている施設であり、冬の動物園はどんな感じなのかを含めて研修会への期待は高まった。研修会は午後からであったが、午前中に園内見学可能ということで、研修参加票を持参してズーラシアの見学と食事を済ませることにした。2024年7月にオカピの赤ちゃんが10年ぶりに産まれたばかりとのことで、オカピは見なければという思いを胸に参加された方が多数いらしたようである。寒空であったが、オカピ展示場までの道のりはやや遠く、おかげさまで正面受付までの往復と愛らしい姿に心身ともに温まった。

～周年事業の事例紹介～

今回のテーマは各施設での周年事業事例紹介ということで、よこはま動物園ズーラシア、新江ノ島水族館、神奈川県立生命の星・地球博物館の3館で行われた事業の中から、過去の事業を年代順に追い、それぞれの担当者の想いを乗せてご紹介いただいた。

●よこはま動物園ズーラシア

周年事業のうち、大掛かりにおこなった開園20周年事業（2019年）を中心に紹介があった（図1）。記念式典、特別イベント、記念誌発行、シンポジウムが一般的によく行われるものとしながらも、芸大とコラボしたナイトズーラシア、20周年にちなんだ全20組限定企画（モーニングツアー、展示される前の動物のえさやり体験、半日園長等数組）、ズーラシアンブラスによるコンサート、記念植樹、アートギャラリー、HPでカウントダウン、飼育員による開園までの道のりトークショー（オカピ20年の道のりほか）、記念グッズ販売など多岐に亘る充実したイベント内容であった。このタイミングで満を持しての年間パスポート販売に、イベント参加者から愛着が沸いたので購入したという声もあったそうである。「周年事業を実施するとそれなりに人が集まってくれる。周年事業では特別体験を提供し、話題性を高め、地域との交流を深めることで、来園者の増加と園のブランド価値・認知度の向上を図ることができる」という言葉が印象に残った。

●新江ノ島水族館

10周年、20周年とゴロの良い数字での周年事業が一般的だが、新江ノ島水族館ならではの企画として9周年（2013年）に実施したク（9）ラゲイヤーの紹介があった。この時に行ったクラゲファンタジーワールドは現在の水族館展示に続く土台となる事業であった。なかでも、クラゲイヤーに向けて「徹底的にクラゲで盛り上げる一年」「9に拘る、クラゲに拘る」を合言葉に、クラゲ社内勉強会を実施するまでに至った熱意に圧倒された。飲食スタッフなど飼育に関わらないスタッフも含めて、館全体でクラゲの知識を高め、案内や商品開発に活かす内部向けの取り組みは、館が一丸となって事業に取り組む姿勢を感じた。事業はクラゲの丸い形を意識して角をとったホールのリニューアル展示、クラゲサイエンスの新設、えのすいクラゲ検定、3日間999名にチャンスのオータムクラゲくじ、9周年9月9日をえのすいクラゲの日として漁港で夜までクラゲ調査に夜間採集、クラゲ展示飼育の歴史を記録写真で紹介するコーナーなどが実施された。翌年の10周年では、「ありがとう」の

想いを込めて事業を進め、「ウミガメの浜辺」のオープンや、江の島といえばシラスということで、「シラスの繁殖展示に挑戦！」の実施など、これらもまた、現在の土日定番メニューになったそうである。ナイトアクアリウムは水族館初のプロジェクションマッピングが投影され注目された。20周年（2024年）では、スタッフユニフォーム用に20周年ピンバッジやワッペンを作成して、周年事業に花を添えた。また、えのすいレジェンドナイトとして、勤続20年以上のトリーターを中心としたトークとツアーを実施している。小田急とコラボレーションした「小田急くらげとれいん」や町田駅をくらげ駅とした企画も斬新であった。次の周年事業に向けて、時代が何を求めているのか、5年・10年先を見据え、ターゲットについて常に考えるという姿勢は見習いたと思った。

●神奈川県立生命の星・地球博物館

発表者は地球博と同じく勤続30年ということで、生き字引のごとく周年事業の歴史をつまびらかにご披露いただけた（図2）。多忙な博物館運営のさなかに、周年という定義に捉われずインクルーシブ・ユニバーサルを掲げ毎年事業を実施している点が特筆される。8周年（2003年）に現在まで続く「ミューズフェスタ」を立ち上げ、地元自治体や自治会、博物館友の会を巻き込んだ県民参加型事業として博物館だけではない事業を行っている。事業は、関わった感が持てると一緒に作り上げている気持ちになり愛着が沸く。20周年は周年事業として、神奈川県立博物館と地球博両館のコラボ企画が展開され、自然系博物館のあるべき姿と評価軸について議論する記念シンポジウムが実施された。今年度迎えた30周年（2025年3月）は、展覧会計画委員会の立案状況、展覧会の予算規模等を鑑み、様々な状況を加味して特別展を開館30周年事業に位置付け、30年間の博物館の歩みと今後30年の未来の地球博を考える展示を全員一致団結して企画することで乗り越えた。博物館の原理に立ち返り、「集める」「調べる」「伝える」こと、現在の課題とそれに関わる人の「思い」、課題を解決した「未来へ」の5章立てとした特別展は、ギャラリートークや定員の10倍を超える応募があったバックヤードツアーなど反響が大きかったという。30周年の冠は伝わりやすくメディア受けもよく、日本人は周年事業に好感を持っているなと感じたそうである。来館者が考える「未来の地球博」へのメッセージ付箋は1500枚の声が寄せられ、博物館への期待と関心の高さが伺える結果となった。こういった声は、教育委員会本体や所管課、知事や県会議員といった影響力の大きい人からも反応があり、話題性に富んだ事業となったそうである。

3館の事例を通じて、「その園や館で提供できる特別なことはなにか」「なにを目的に実施するのか」、そしてこの軸がぶれないことが、事業を提供する側にとっても大事であることを学んだ。

おわりに

研修会で紹介していただいた周年事業は、どの施設も館の個性を活かし、経営の実態に即した内容となっていて興味の尽きない研修時間であった。周年事業は館の振り返りもできることがいいところであるという。従事している館の規模は違うものの、自分の館でも工夫したらできるもの、効果のありそうな事業のアイディアを知ることが

図1　事例紹介Ⅰ

図2　事例紹介Ⅲ

できたので、早速来年の事業に活かせると、一緒に参加した同僚と盛り上がった。今後も担当者のリアルな声を聴くことができる機会としてこのような研修会に積極的に参加したい。